

環日本海における先史時代の岩画の研究 平成 19 年度ロシア沿海州の調査
大塚和義（大阪学院大学）

1. 環日本海における岩画遺跡は、少なくとも 3000 年以上前から制作され、その目的にそった儀礼が行われてきた場である。現在までに知られている岩画全体のモチーフを巨視的に捉えると、およそ 2 つのグループに大別できる。その第 1 は、サカチ・アリヤンを中心とする仮面を主体とする岩画群であり、第 2 に仮面をまったく表現しない岩画群である。両者の遺跡が混在するアムール川の支流のウスリー川流域は、わたしが提唱する「岩画の道」の幹線をなす重要な地域である。ロシア・沿海州と中国・東北地区から陰山山脈に連なる「岩画の道」というわたしの仮説を補強する考古学的新資料が、近年、ロシア、中国、そして日本において発見されている（第 1 図）（第 2 図）。

「岩画の道」こそは、地政学的に優れた位置にあり、先史時代から続く交易路として機能しているばかりか、現在も中・口の軍事的戦略拠点として一般人の立ち入りが困難な地点が多い。その理由により、岩画遺跡の調査が行き届いていないのである。沿海州の大河であるアムール川流域には、岩画が相当数残されているが、いまだ全体を見通す詳細な調査はなされていない。

アムール川流域で、本流の中流域に位置して 1 km 以上に亘って岩画群が存在するサカチ・アリヤン遺跡が最大規模である。しかし、100m から 200m 程度の壁面に描かれた岩画遺跡の相当数が未発見であると考えられている。たとえば今回、ロシア側から提供された情報では、キヤ川岩画遺跡に程近いスウクバイ岩画は 1990 年代になってはじめて調査されたもので文化局に提出された概報しかなく、正式な報告書は刊行されていない。このように未発見未調査のものは相当数存在すると考えられる。

このたび機会を得て調査を行ったキヤ川岩画遺跡は、アムール本流に注ぐウスリー川下流の支流に位置する。この遺跡の存在は、1950 年代にシベリア考古学の基礎をつくりあげたオクラドニコフ博士によって、はじめて調査され報告もされている。しかしながら、軍事基地内にあるために十分な調査がされないままであったが、ロシアの研究者の協力を得て調査が可能になり、2 月の厳冬期にわたしと日・口の共同研究者 2 名、都合 3 名で実施した。

2. 調査の成果は、キヤ川の川面が凍結した時期を選んだゆえに、川の中央にたつて遺跡全体を俯瞰できたことであった（第 3 図）。また、詳細なデジタル画像で岩画のモチーフごとに撮影することができ、現在の研究水準に耐えうる分析用データを得たことである。さらに、本遺跡の岩画が、岩面を彫刻してモチーフを表現したものと、切り立った岩の平面をキャンバスにして赤色顔料でモチーフを描いたものの 2 種類の技法が同時にもちいられていることも再確認できた（第 4 図）。

最大の成果は、岩画群の中心的存在が赤色顔料で描かれた舟のモチーフであると推定できたことである。舟のモチーフを描いた場所は、その下段に祭祀の場とみられる祈りの人物が座ることができる平面が人工的に整備されており、ここが主座的性格のものであったとみてよいであろう。このように岩画群のなかに主座が明確に捉えられる事例はユーラシア岩画群のなかでもわずかである。赤く鮮やかに描かれた舟は、おそらく、3000年以前の新石器時代に描かれ始めてから、ごく近年まで、つまり20世紀初頭、ウデヘなどの狩猟民が活躍していた時代まで、岩画群がそのモチーフのもつメッセージを発信し、これを厳粛に読み取る人たちによって聖なる場所として特別の祭祀の場であったことを示していると考えられる。

キヤ川岩画の仮面はそれぞれが異なる表情をもつが、全体的には近くに所在するサカチ・アリヤン岩画やシェレメチェヴォ岩画（第5図）と共通している。さらに、近年、中国・赤峰市近郊の白廟子山岩画が発見され、そこにも多くの仮面が描かれている。白廟子山岩画の仮面は、ロシア・アムール川流域の仮面岩画と近縁性を感じさせるが、白廟子山独自の表情をもつ仮面でもある。この白廟子山岩画は、わたしが仮に「アムールタイプ」仮面と呼ぶもののカテゴリーに入るものである。今後、赤峰とサカチ・アリヤンを結ぶ中間地点に仮面岩画が発見される蓋然性が高い。

今回のキヤ川岩画の調査によって、同時に得られたロシア側研究者による新たな情報によって環日本海をめぐる岩画群のうち、ユーラシア大陸側の様相が明確となった。ことに、日本の岩画を代表とするフゴッペ洞窟岩画（第6図）のように、まったく仮面をもたないものと仮面を集中的に表現するアムール川中流域の様相を的確に捉えることができたことは大きな成果である。また、岩画の主座の存在も明らかにできたことも成果のひとつである。今後、昨年度、富山県日本海研究支援事業として実施した韓国・盤亀台を中心とする韓国南部岩画調査の成果（注）とあわせて、巨視的視点からの継続的な環日本海地域の岩画調査が行われる必要性を強調しておきたい。

このアムール川流域の岩画は、すべてが劣化と崩落による破壊が進行しちちあり、これに対する何らかの保存対策が緊急の課題である。観光化によって、彫刻面が傷つけられる現実がサカチ・アリヤンでは顕著である。現在、比較的によく保存されているキヤ岩画も劣化による崩落が進みつつある。

今回調査を行ったキヤ川岩画を含む地域は、まさに、アルセーニェフが優れた著作に現したウデヘの狩人、デルスウ・ウザーラその人が獣を追って生活の舞台とした地域であり、かれが悲劇的な死を遂げた場所とされる地点には一個の巨石に追悼の銘文が刻まれている。デルスウは、獣と対話し、あくまでも狩人として生きぬいたことに、人びとは心うたれるのである。いうまでもなく、自然を破壊し尽す道を選択したおろかな現代の人間たちに、デルスウはその生涯をかけて語っているといえよう。わたしたちは、かれの生きた世界に永遠に分け入って体験できない地球環境にしてしまったことの責任を考えるべきであろう。

注：「平成 18 年度富山県環日本海研究グループ支援事業報告書」参照



第 1 図 「環日本海の岩画」

地域別にみた形象の種類

形象の種類	1 人体	2 人面(仮面)	3 狩猟者	4 獣類	5 鳥・魚・野鳥	6 船(舟)
地域名 フコフヘ洞窟 (日本)						
サカチアリアン(ロシア)						
鯨島台(韓国)						
隴山山地(中国)						
モンゴル窟						
バイカル西部・ アルタイ山麓周辺						
トマク周辺						

※ここに抽出した形象は、それぞれの遺跡の正式報告書を可能な限り用いた。フコフヘは全市町の刊行物、サカチアリアンはオクラドニコフ著の報告書、鯨島台は文明大著の報告書、隴山は藍山林著の報告書、アルタイはクハレフ著の報告書などである

©大塚和義

第 2 図 「地域別にみた岩画形象の種類」(大塚和義作図)『文化遺産』18号掲載



第3図 キヤ川岩画遺跡前景 右の岸に岩画群（大塚和義撮影）



第4図 キヤ川岩画のモチーフ（オクラドニコフによる）

上段：仮面、中段：仮面と不明図、下段：右 シカ、中央、鳥の首、左端 舟



第5図 シェレメチェヴォ岩画の主要な仮面（オクラドニコフによる）



第6図 北海道・余市 フゴッペ洞窟岩画（『フゴッペ洞窟』フゴッペ洞窟調査団より）